

# 日本人の 集合的記憶 と国際理解教育の課題

## 歴史教科書問題の周辺と底流を見つめつつ

井上 星児

広島大学大学院国際協力研究科・教授

〒739-8529 広島県東広島市鏡山1-5-1

E-mail: seinoue@hiroshima-u.ac.jp

### 1. 内包的・外延的な教科書問題と、 国際理解教育の課題

今年（2001年）の夏に起こったケースもそうであるが、ここ20年来の日韓・日中における「歴史教科書摩擦」の問題の構造は、日本の歴史教科書に何が記述され、その記述が国家検定でどのように承認され修正され、あるいは拒絶されたかをめぐって、歴史的に重大な関係をもってきた近隣諸国から強い再考要求が来ている、というパターンである。これは、内包的な教科書問題といえるもので、もとよりその解決自体もけっして容易なことではないけれども、それとは別の教科書問題の構造もありうる。すなわち、教科書に何が記述されてこなかったか、関係諸外国の方には、その主題について（日本人に）記述してもらうに足るだけの熱いこだわりや運動が久しい間存続してきたのに、なぜ日本の教科書にそれが採りあげられるのがこんなにも遅れたのか、という問題である。いわば外延的な教科書問題とでもよべるもので、じつはそこでは、日本人の集合的記憶（パブリック・メモリー）のあり方というもっと厄介なテーマが問われてもいるのだ。

例をあげよう。「従軍慰安婦」という歴史主題については、日本の教科書がそれを記述するか否かはすでにおおむね克服済みの問題とされているようで、今回の韓国等からの主たる改善要求項目には含まれていない。むしろ、問題の扶桑社版のような教科書にはその類の記述はあるはずもないが、一般的にいってこの主題に関しては、

日本の教科書の編集・執筆者側も検定行政の側もはや思慮を欠いた態度は採らないよだという認識を、関係近隣諸国からさいわいにも持ってもらえているからだ。すなわち「従軍慰安婦」は、もはや内包的な教科書問題ではなくなりつつあるといえるのである。しかし他方、アメリカの戦後日本史研究家ジョン・ダワーがその近著で、「従軍慰安婦の実態が明るみにでるのに、なぜこれほどまで長い時間が必要であったか」と、問題化の有無ではなく問題化までの時間にこだわることの重要性を強調したように、外延的な教科書問題としてはなお大きな暗部を残しているのである。

昨年ピューリッツァー賞を受賞したダワーの大著『敗北を抱きしめて』は、敗戦後の日本人が選んだもろもろの行動に対する理解と敬愛と他方で本質的な批判とを、米国の対日政策への厳しい再点検（おそらくアメリカ人がなすうる最も深い良質の自己言及）と併せて語った卓越した著述であるが、そこにおいてダワーは、「戦後日本人の戦争責任を考える場合のひとつの難問」であるところの「従軍慰安婦」イシューについて、問題の視角を（おそらく、とりわけ日本人の読者に向けて）こう提起する。

「『隠された戦争犯罪』のうちでも、もっとも厚顔無恥な例のひとつである従軍慰安婦の実態が明るみにでるのに、なぜこれほどまで長い時間が必要であったか。あるいは、もっと絞っていえば、なぜ日本の男性だけでなく女性たちも、外国人慰安婦の犠牲をもっと早く問題にしなかったのか

(.....). 少なくとも、ここには人種と階級という要因が含まれている。従軍看護婦のような日本女性は、外国人慰安婦の存在を十分に知っていながら、日本人男性と同じく、一般に慰安婦たちを外国の売春婦として見下していた」と (Dower (99) p.640, Note 53. 邦訳: 下巻483頁, 注51)。

これは、まことに手厳しい(戦後民主主義社会を形成して以後の)日本人に対する本質的批評である。このすぐれた歴史家の当惑と憤憑のにじんだ疑問が蔵している意味あいは、今と未来の日本人によって誠実にかつ主体的に受けとめられなければならないだろう。すなわち、他国民とかかわった一つの深刻な歴史的体験が何らかの事情で封印され、長い時間を経て再び国民に共有されるようになった場合、その封印および開封の理由と責任主体を明らかにするという態度の重要性ということである。それというのも、日本人は、これまでの対外関係史において、しばしば他国民を困惑させ、憤激させ根深い不信に陥らせるような、国民の集合的記憶(キャロル・グラックのいわゆる「パブリック・メモリー」Gluck (1993))の驚くべき消失ぶりを、少なからず露呈してきたからである。

そして、筆者自身の専門にひきよせていえば、従来の「国際理解教育」研究の議論のなかでは、こうしたテーマが国際理解教育の教育内容論(高校や大学レベルのそれらにおいて)として俎上にのぼることはなかったのである。とはいえ、いやしくも国際理解教育が、歴史的に生じた諸国民・諸民族間の誤解や不信・敵意を、当事国・関係国等の子孫世代がまず事実認識し、その上でそれらの解消のために、他者理解と自己言及を二本の柱として行う教育的・人間形成的いとなみの全体とするなら、他国民から見てしばしば理解困難で人を当惑させるこのような日本人の「集合的記憶の消失」の問題は、まさに当該教育の本質的に重要な課題に位置づくものであるはずだと思われる。

## 2. 日本人の 集合的記憶の排除 ないし 思考の空白 現象

もとより、ダワー自身、「どの文化においても、

どの時代でも、人々は自分たちの戦死者を神話化してきた。その一方で、自分たちが踏みこじった相手については(.....)多少なりとも思いを致すことがあったとしても(.....)すぐに忘れてきた」という前提認識を語っているように、どの国民・民族にも、集合的記憶の風化や空白現象は存在する。いな、われわれは、そもそも「国家の本質とは、すべての個人が多く的事柄を共有し、全員が多くのことを忘れていくことです」という、エルネスト・ルナン『国民とは何か?』における有名な揚言を、先に思いだすべきであるかもしれない。

とはいえ、われわれ日本人がそのような民族の記憶の排除 ないし 思考の空白 に陥るのは、その歴史経験から来る独特の、かつ深刻な政治的意味合いを有する、集合的心理のメカニズムによるのではないかと。かつて丸山真男が(ミカドの軍隊で殴られ続けた通信連隊二等兵として帰還した敗戦直後、および1998年の死の直前の講演でも)悲痛に問いかけて以来、日本人の誰もが本気で考えたがらなくなったこの重い問いに、今たとえば在日の作家・梁石日(ヤン・ソギル)のような人が、正面からこんなふうに誠実な自答を呈する。

梁は、日本の「マスメディア関係者が、思いもよらぬ形で自己表出」するに至った「1988年9月からはじまった昭和天皇の下血に対する反応」に、その秘密を見いだしている。「新聞、テレビ、雑誌は、あたかも言論統制でもしかれたかのように同じ論調をくり返し、(.....)誰かが強制したわけではないのに、マスメディアに『自粛』という言葉が出はじめると、(.....)自粛したくない者まで自粛せざるを得ない暗黙の見えざる力」が支配して「日本の街という街は薄暗い灰色につつまれていった」と。梁は「日本人にとって天皇とはどういう存在なのか、いままって不明瞭だが.....」と困惑しつつも、その本質を「求心力でもあれば遠心力でもあるような、日本人の総合的な感性の核を重層的に形成している一種異様な合力」と看破し、「真・善・美の最高形態としての天皇に対して、いかなる哲学・思想・宗教も、いかなる美意識も止揚を許されない」と断ずる。

そして彼は、そのような天皇の「日本人のより

どころであると同時に、日本人の身体を自縛してやまない位階性」の根拠を追究して、「本当は新聞の感性そのものが天皇制だった」のではないかと、目を転じて日本人の心性形成におけるメディアの位置と性格、構造と機能を、天皇制との関係で見定める。私見では、この梁石日の日本のメディア=天皇制論は、そこからおそらく日本人の集合意識の特質が析出できる、おそるべき深い洞察ではないであろうか？ 天皇は自己言及の契機をもたない。そのような天皇制に擬せられる日本のメディアは、もしかすると肝心なところで、同様に自己言及を欠落させることがありうる（あたかも第二次大戦中、大本営発表をそのまま無批判に国民に流したわが大新聞の多くのように）ということである。（ちなみにそれは、あるいは「在日」という日本社会を内部・外部の交錯した視座から眺めうる知識人にして初めてもつことが可能であった鋭い観点であるかもしれない。）

そして、そのような日本のメディアが時々露呈する思考の空白や記憶の排除は、メディアへの無意識下の依拠（判断の委譲）を天皇制への無意識下の依拠と心の奥で重ねている、日本国民全体のそれらに連なっているともみることができる。

ついでにいえば、近代のナショナル・メディアが形成される以前の日本社会でも、それに代わる公儀の高札やその陽画ないし陰画としての世間の取り沙汰や談義が、日本人の思考・判断を方向づけ、停止させ、忘却もさせたといつてよいかもしれない。

さて、ダワーは前掲書で、戦後の日本社会においてわれわれ日本人が何度か露呈した、外国人の目からみればかなり理解困難であるらしい、民族の記憶の排除現象ないし思考の空白現象をいくつかとりあげて、驚くべき精細で説得的な論究を行っている。

終章に、たとえば次のような総括的な章句が見いだされる。「ちょうど戦中の残虐行為が記憶から排除されていったのと同じように、この瞬間から、かつての最高司令官〔マッカーサー〕は人々の記憶から排除されはじめたのである」と。

これを分節化して見てみると、ダワーの問題提起は次のような内容となる。

(a) 戦時中に日本人が内外で行った残虐行為に対して敗戦直後に日本国民が抱いた反省意識が、戦後のどのような要因と政治力学で速やかに日本社会から消えていったのか。

(b) 解任され離日するマッカーサー元帥に対する日本のメディアと国民の異常なまでの惜別と感謝、称賛と顕彰の熱狂が、彼我のいかなる契機と経緯で突然に霧消していったのか。

ダワーは、(a)の面について、こう分析する。「南京大虐殺のような大規模で長期にわたる蛮行は、日本の報道関係者に目撃され、国際的には公にされてはいたが、日本国内では公表されてはいなかった。(……) 1945年初めのマニラ大虐殺にまで及ぶこのほかの大量殺戮も隠されていたため、フィリピンと中国での残虐行為を中心にした詳しい報道が最初にされたとき、日本人は痛烈な衝撃をうけた。あまりに強烈で、これに較べたら、ほかの残虐行為が色褪せて見えたほどだった。(……しかし……) もと植民地だった朝鮮と台湾の人たちに対する犯罪には、戦勝国も、敗れた国も、比較的関心が薄かった。皇軍によって死ぬまで酷使された膨大な数のインドネシア人労働者に至っては、まったく気にもされないも同然だった。/いづれにしても、残虐行為は1945年9月から東京裁判終結までに大々的に公表され、その反応として心からの嫌悪感を表した人たちも少なくなかった。」(343 - 344頁)

こうした文脈において、当時の日本人が、庶民の一人ひとりから出版人、政治家にいたるまで、いかに深くそれら戦時中の同胞がなした残虐行為の数々に震撼し、自責し、恥じ入ったかの実例を、ダワーは新聞や秘密の政治文書等あらゆる資料を掘り起こしながら、正確な歴史事実としてわれわれの前に提示する。そのような戦争中の残虐行為がたしかに存在した事実、それらの多くが国民に秘匿されたこと、戦後それを知った国民が深くそれらの旧事実につき、反省したこと、それらの（おそらくは近年のわが国の「自由史観」論者

がどこまでも否認したいであろう)一連の事実を、ダワーはこれ以上ない説得力で読者に提示した。同時にしかし、ダワーは、そうした日本人の反省や改悛の記憶が、ほどなくして潮の引くように大々的に消失していった事実も冷徹に紹介した。しかも、それについてはアメリカ本国政府とマッカーサー占領軍総司令部の大きな対日政策の転換が、そのような日本人の倫理的姿勢を放棄させる決定的な力を果たしたことを、ダワーは率直に自己言及するにやぶさかでなかった。とはいえ、それは、けっして日本人の完全なアライナイしイノセンスを証明するものとは、ダワーは認めていない。そうした 自責 の心情が、もともと日本人には「脆弱で断片的」な形でしか所有されていなかったため、そのような 外圧 がかかると、たちまち「加害者」としての日本という認識が広まることをやめ、後代に受け継がれていくということを阻害したのだとダワーは見る。「そしてその数年後には、冷戦の緊張が高まり、この国を占領していた者たちが共産国となった中国を大敵とみるようになって、日本人による残虐行為の記憶などほじくりださないことがアメリカの重要な政策のひとつになった。天皇の臣下たちが直接手を下し、くりかえした惨劇が暴露されたことから起こった〔日本国民自身の戦争犯罪に関する自責意識の〕鋭敏な反応は、もともと脆弱で断片的であって、犠牲者 (victim) としてではなく犠牲を強いた者 (victimiser) としての日本という認識を真に広く一般の人々の心に育てることはなかった。」(p.508, 邦訳347頁)

ここに見られるわれわれ日本人の戦時残虐行為への「記憶の排除」現象は、国際理解教育論の観点からも、十分に検討されなければならないだろう。

一方、後者 (b) の日本人の 記憶の排除 現象は、一見もっと軽い性質のもののように感じられるかもしれない。しかし、じつはここには、さらにいっそうわれわれの国民性の本質に触れる側面が見られるのではないと思われる。

マッカーサーは帰国後、上院で自分の対日占領行政について3日間にわたる聴聞をうけた最後で、日本人についての感想を問われて「われわれ

が四五歳で成熟した年齢であるのに比べると、一二歳の少年といったところ……」と彼としては悪意を込めていない印象を語ったのだが、米国では何の関心も集めなかったこのくだり(全17万4000語の議事録の中のわずか5語“like a boy of twelve”)が、日本では大変な騒ぎを巻き起こしたのだ。その事実を、ダワーは内外の史料を駆使して活写している。「それは、日本人の顔を平手打ちした言葉のように受けとめられ、これを契機にマッカーサーを包んでいた神秘的イメージが失われはじめた。(……)突然、多くの日本人がなんとも説明しがたい気分ですらを恥じた。ちょうど戦中の残虐行為が記憶から排除されていったのと同じように、この瞬間から、かつての最高司令官は人々の記憶から排除されはじめたのである」と。

ここには、われわれが民族の 記憶の排除 や 思考の空白 に陥るのはどういう集合的心理(問題)によるのか、のある意味で典型的な構造が見いだされると思われる。しかし、それ以上の論究は他機を期すばかりではない。

### 3. 日朝間の 未発 の係争事案と 蜜月 時代の回顧

ところで、2000年夏の上述の扶桑社版・歴史教科書を検定で通した日本政府に対する韓国側の抗議は、同教科書の採択合戦における苦戦の報道とともに一応鎮静化した。が、ここ20年来の日韓「教科書摩擦」では問題化していない、日本と朝鮮半島の間には横たわる隠れた係争の火種が、じつはほかにもある。4世紀前の大事件で、その 痕跡 が日本の中心都市に現存する「耳塚」とよばれる丘がそうである。それは今後、内包的な教科書問題としてよりも、外延的な それとして、われわれには大きな検討の材料となるであろう。

耳塚は、京都市東山区、豊臣秀吉をまつる豊国神社の向かいにある。高さは約9米、周囲約50米、今日なお通行人にある種の存在感をもって迫るこの盛り土の史跡には、朝鮮半島からの参詣者が絶えない。

日本の歴史教科書に「耳塚」の記述が国の検定

を通過して登場したのは、つい15年ほど前、1980年代半ばの実教出版のそれが最初であった。今日では欄外のみ挿話まで含めれば半数近い教科書が載せており、最近の若い日本人のなかには耳塚の名に多少覚えがあるという者も少なくないが、年配世代はまず知らないようである。

じつは過去400年間の、その小さな史跡をめぐる日本・朝鮮2つの民族内での語り伝えられ方には、1対1000以上の開きがある。第三者である米国の極東通ジャーナリストや国際政治学者らが、何本かの著述で、今後「耳塚問題」を日本側がどこまで誠実にとり扱うかで東アジアの友好・平和に影響がでる旨まじめに忠告してくれていることなども、日本ではほとんど看過されている。

その耳塚が設営されてちょうど400周年にあたる1997年、9月14日付けニューヨーク・タイムズに、『日本、朝鮮、そして 屈辱の年 1597年』と題する衝撃的な論文が掲載された。筆者は、同紙東京支局長ニコラス・クリストフ。同支局長(ちなみに彼もまたピューリッツァー賞受賞者である)は、同論文の冒頭で、「耳塚のことは、京都以外ではほとんどの日本人が知らないが、韓国・朝鮮ではほとんど誰もが知っている。(.....)多くの韓国・朝鮮人にとっては、それは日本人の野蛮さのシンボルであり、地表下にあっていつ何どき爆発するかもしれないものなのである」と、日韓両国の認識の落差を報じた。そして、『耳塚』は、ある種の事件が、いかにその受難者や被害者たちが土に帰して後においても長く化膿し続けるかということを物語っている。(.....)むしろアメリカ人もまた、死体を切り刻んだ経験をもつ。ヨーロッパからの移民がインディアンの頭皮を剥いだし、その逆もあった。とはいえ、それらの蛮行は今日(耳塚の物語が)東アジアにおいて有するような政治的・社会的残響はひき起こしてはいない」とも、クリストフはのべている。

ところで、その昔から今日まで韓国・朝鮮でも憎まれている日本人は、豊臣秀吉と伊藤博文であろう。秀吉の朝鮮侵略を阻止して戦死した朝鮮水軍の将・李舜臣(イ・スンシン)と、伊藤の朝鮮植民地化に抗して彼を射殺し、控訴もせず刑死した義士・安重根(アン・ジュングン)は、それゆえ、ともに最大の民族英雄として祀ら

れている。

ちなみに(私の専門の「国際理解教育論」の視座でいうならば)、死刑を待つあいだ旅順の獄中にあった安重根と、獄吏である日本軍憲兵の千葉十七(ちば・とうしち)との間に、奇跡のような人間的信頼と友情が芽ばえ、安の刑死後も双方の子孫の交流が朝鮮海峡をこえて今日まで代々続いている秘話は、日朝の心ある人たちの間でしっかりと共有されている(Inoue(1998))。

逆に、秀吉問題と伊藤問題という「二悪」の間にはさまれた「江戸時代」は、家康による国交回復を契機とした日朝関係の幸福な時代であった。現代の日本人にとってのその再確認は、とりわけ重要である。対馬藩を出入り口として、約200年間にのべ12回、朝鮮国王から日本に派遣されてきた友好・通商・文化使節団としての「朝鮮通信使」が、毎回300~500人の朝鮮服の大行列をなして、鎖国下の官民の日本人に、沿道で、宿泊所で、どれほど歓迎され、学問・技芸、海外情報の伝授を熱烈に請われたことか.....。ちなみに「通信使」という語にある往時の「通信」とは「信(よしみ)を通わず」という謂の誠意と信義の交際を意味していた。日本人は、一行のなかの医家、画人、楽士、調理人などから最新のあるいは異文化の達成を懸命に学んだ。通信使の側もまた、日本から例えば対馬経由でサツマイモ栽培法を持ち帰り、後に同国の飢饉を救った食料として今に語り伝えられることにもなった。そして、その「朝鮮通信使」ベースの近世日朝交流に絶大な寄与をなしたのが、1990年に訪日した盧泰愚(ノ・テウ)韓国大統領が皇居での歓迎晩餐会でとくに言及したところの、対馬藩の外交官・通訳で儒学者の雨森芳洲(あめのもり・ほうしゅう)であったことは、われわれの記憶に新しい。

#### 4. 「耳塚」 この、共有されざる民族の物語

かつて文禄・慶長期の前後5年間に16万余の將兵を送った秀吉の朝鮮侵略は、彼の悪名高い東北検地の際の戦略と同様、当時の朝鮮人口の3分の1近くを軍民・老若・男女の別なく「撫で切り」に処する大被害をあたえた。遠征に先立ち、秀吉

は加藤清正や藤堂高虎ら出兵する各大名に、戦功の証として「敵軍の将なら首を、それ以下の者なら鼻を」切り取って持ち帰るよう命じた。その結果、10万個をこえるといわれる鼻や耳（それらを現地で検分した軍目付の出す「鼻請取り状」が3万通近く今に残っている）が、壺に塩・石灰漬けにされて、秀吉のもとへ送られている。死体からのみならず生きている者からも切り取られたため、「其の後数十年間、本国の路上に鼻無き者、甚だ多し」（趙慶男）との報告があるほど、朝鮮側の被害は深刻であった。秀吉は、1597年9月28日、それらの鼻・耳のための墳墓（「鼻塚」・江戸期の17世紀半ば頃から林羅山の著述などの影響により「耳塚」の名でより知られるようになった）を今の地につくり施餓鬼（供養）を行ったが、しかし今日では、「施餓鬼は秀吉の『慈悲』を示す虚構の供養であった」（北島万次）とみる見方が学界では有力である。

さて、前出の雨森芳洲は、享保期に2度、朝鮮通信使に通訳等として随行し、対馬から九州・東海道を通って江戸入りしたが、その過程を回顧した自著『交隣提醒』で無念そうに語っているように、使節一行が京都入洛の際、秀吉ゆかりの史跡、方広寺に属する「耳塚」をめぐって日本側と一騒ぎがもちあがった。幕府側が、この耳塚を客人に見えないように、膨大なスタレで覆い隠してしまったのである。その一件は、幕府の外交記録（「通航一覧」）にも記されているが、隠すいわれを知った通信使たちは、先の文禄・慶長の役（壬辰倭乱）で被った自民族の悲劇の痕跡たる耳塚を、夜半、市中の朝鮮人の捕虜らも含めて訪れ、号泣して慰霊したと伝えられる。

そして、この一騒動を境に、「耳塚」への日本人の集合的記憶は、これまた潮が引くようにフェイド・アウトしていった。そうした世相のポリティカルな背景には、幕閣における対朝鮮関心の後退、それに反比例しての新井白石のヨハン・シドゥッチ尋問をきっかけとする「西洋事情」への新たな覚醒……等があるともいわれる。これ以後の時代には、せいぜい寛政期の『都林泉名勝図絵』に、京見物をしている3人のオランダ人が「耳塚」に見入る風俗画が残っているくらいである。そして、考えてみると、あのとき公儀によって透

明なる存在と化させられたこの「京都・耳塚」ほど、今回の日韓の歴史教科書紛議にまで通底する、以後の日本と韓国・朝鮮関係における日本人の対朝鮮集合記憶のあり方を象徴する材料もないのではないか。

明治維新後は、10年前後の征韓論の曲折を経て、日清戦争が朝鮮半島を蹂躪するかたちで勃発すると、状況をかつての秀吉の「朝鮮出兵」とのアナロジーでとらえる思潮が一部の国粋主義ジャーナリズムにあらわれた。そのような機運に鼓舞された国士の浪漫派歌人・与謝野鉄幹は、植民地・朝鮮半島に渡っての大きな世俗的成功を夢想して、「いにしへに何か譲らむ耳塚を再び築（つ）くもほどちかくして」という武断主義の歌を発表（『二六新報』1894.8.4）し、一部世間の耳目をひいた（木村、2001）。また、明治30年（1897年）には「耳塚300年祭」にちなむ「耳塚修営供養碑」が同地の一角に建てられ、再び秀吉の遺徳がしのばれたりなどした。しかし、そうした単発的な事象を除けば、耳塚がもはや再び、日本国民の間でのグランド・ナラティブとなることはなかった。そして、世論は大きく韓国併合へと向かう……

他方、朝鮮半島では、「耳塚」は民族の悲劇の物語として、近現代の民衆の生活の場で、あるいは学校の教室で、脈々と語りつがれることになる。朴政権下の1970年代の韓国では、「京都・耳塚」にどう対処するかで大きな議論があり、それが朝鮮民族にとって恥辱の象徴であるから日本に撤去を求めるべきだという廃絶論、受難の父祖たちの魂を鎮めるため韓国に取り戻すべきだとする「環国」論も出されたが、多数は、耳塚はやはり過去の蛮行の記念碑として日本に置いておくべきだという現状維持論が占めたといわれる。

1980代に入ると、韓国・朝鮮から渡来する各種民間団体や在日系のそれらによる京都での耳塚供養熱が高まる。「朝鮮日報」（1996年1月17日付け）は、韓国の民間団体「耳塚返還推進協議会」などの関係者が来日し、京都市の「耳塚保存会」（京都市地方文化財となっている耳塚を保存・管理している民間団体）などの協力を得て、「耳塚韓国奉還のための『耳塚環国法要式』」を行った旨を伝えている。とくに1997年の「耳塚400周年」以

後は、京都市民ら日本人有志の積極的な参加・協力も得て、毎年9月28日に盛大な「耳塚法要」が営まれているほか、「還国」推進運動も再燃している。

とはいえ、耳塚の管理維持に日本の国庫から支出している費用は十分ではなく、その管理維持については、日本人とコリアンのボランティアが草刈りや掃除などの奉仕作業をしていることで、まかなわれている。秀吉の大河ドラマがテレビで大当たりを取ったときも、耳塚は観光コースに含まれることもなく、日本人の集合的記憶から、ほぼ完全に消失したという以外にない。

前出のクリストフ支局長は、のちにフォーリン・アフェアーズ誌上(1998)でも「京都・耳塚」をとりあげた論文を発表し、日本人が自覚に欠けている東アジアの国々との間での深い「歴史認識の断層(historical fault-line)」を示す典型的挿話として論じている。また、東アジアの地政学的関係に鋭い関心をもつ米国の外交専門家や国際政治学者(M・アマコースト、K・パイルら)も、論文で「日韓関係の紛議の歴史の象徴的事例」としての「京都・耳塚」に言及するなど、総じて米国の極東通の知識人のこの問題への関心が目立つ。(なお、それとは直接関係のない話であるが、太平洋戦争中、米国の軍部・メディアが、敵国・日本の残虐な国民性を物語る格好の宣伝材料として、この「ミミツカ」の逸話を一時流布したこともある。その話を、筆者は幼少時、駐留米軍キャンプに勤務していた身内から聞いた記憶がある。)

##### 5. 隣人 同胞からの寛容な呼びかけと、戦争責任の「アジア単位」「個人単位」の記憶を

以上にみてきたように、コリアンにおいては過剰なまでに内面化され、他方日本人においては民族の記憶の空白・喪失としか言いようがない「京都・耳塚」問題について、日本の歴史=社会科系の教科書では、1980年代の半ばまで記述されるということにはなかった。また、その不在について、韓国・朝鮮から公式の抗議がくるということもなかった。しかし、80年代半ばに実教出版が初めて「耳塚」への言及を含む教科

書を発行して以後、今では中学・高校の教科書の半数が「耳塚」のこをとりをり上げています。

むろん、その第1号の教科書に対する文部省の検定では、記述が「生々しすぎる。もっと筆を抑えるよう」いわれ、また「秀吉が死者の霊を弔うために信仰厚く『耳塚』を奉納したことをもっと認めるよう」修正意見がついたと、版元はいう(Kristof(1997))。しかし、その文部省見解についても、今のところ韓国・朝鮮の方から特段のクレームは来ていない。

かの半島の人たちは、誰も「耳塚」に関して、日本人に謝罪要求をしてきてはいない。しかし、日本人にとって、少なくともそれが歴史的に何ものであるかを知ること、それが自民族の関心や記憶から消え去っていった社会的・心理的要因を自己言及すること、それを400年間忘れることのできない隣邦の民衆の心情を思いやること……は、なによりも日本人自身の 国際的成熟 のために重要なことであると思われる。

そして、そうした文脈に立ったとき、前出のクリストフ論文が伝える京都在住の在日コリアンR氏の、次のような「耳塚」400周年記念事業の主催の弁は、民族の 屈辱 の契機を 善隣 のそれに換える寛容さで、深く日本人の廉恥と歴史清算の念を呼びさますものではなからうか。「われわれの目的は、憎しみに根ざすものではない。むしろその要諦は、歴史の教訓に学ぶというところにある。(……)民族間の紛争や憎悪は、この東アジア地域に特有のものではない。ボスニアその他いたるところで、われわれはそれらを見てきた。それは普遍的なものであり、それを消し去るのは容易ではないことも承知している。しかし、これ(記念事業)は、先に踏み出す第一歩なのである」と(Kristof(1997))。

われわれは、この遠い昔の両民族の 物語 を、再び共有すべきときに来ているのではないか。

天皇の御所が長く存した街の主要部に位置する「京都・耳塚」は、その物語内容への負い目のゆえに、日本人の視野(メディアを潜在的な基盤とした)から消失し、判断停止を招き、記憶からも後退し、民衆の説話においてすら語り伝えられなくなった。他方に、その隣邦への切り離しとそこ

での軽んじられた運命に、痛憤と悲しみの情を40年間燃やし続け、その忘却への抵抗や供養行動、さらには「環国」運動をさえ推進せずにはいられない国民がいる。そうした不条理な状況が、歴史教書問題以前、植民地侵略以前からの朝鮮半島の人々の日本人への割り切れぬ思いを醸成してはこなかったか。

そして他方で、朝鮮半島と日本とのそのあまりに対照的な状況を憂慮する、政治・経済・軍事・外交あらゆる面で日本・朝鮮半島関係に重大な関心をもつ米国のリアリストの専門家たち（ジャーナリスト、国際政治学者、外交官、等々）が存在するという。国際理解教育論の観点から見て、そういう三者鼎立の緊張の共存は軽視されてよいのか、というのが小論の一応の骨子である。

しかし、筆者の「集合的記憶」論のより深い射程には、日・欧・米の歴史動向に広い視野を持ちつつ日本と東アジアの近現代関係史の難題を鋭く読み解く米国の同時代の歴史家キャロル・グラック女史の、次のような欧・米・日の集合的記憶の交錯する問題認識を共有するものがあることを、最後に述べておきたい。いわく、

「……ヨーロッパには50年の共通の歴史があったし、40年前からのEECの経験も長く、ドイツとフランスなどの努力によって「ヨーロッパの記憶」があらわれてきています。日米関係に拘束されてきた日本は、アジアに目を向けておらず、地域としての「アジアの記憶」はこれからなんです。その意味ではいまアジアでの戦後が始まったばかりです。(……)日本人は戦争の記憶をヨーロッパ諸国でのそれと比較したがりませんが、やはりアジア諸国の記憶と比べるほうがいいでしょう。侵略し植民地にした対象はアジアなんですから。要するに、ヨーロッパの記憶をふまえて日本の戦争の記憶を考える時、個々人の責任とアジアの記憶は欠かせないでしょう」と。(傍点、引用者)

## 参考文献

- ・ Armacost, Michael H. and Pyle, Kenneth B. (1999), "Japan and Unification of Korea: Challenges for U.S. Policy Coordination", NBR ANALYSIS, (The National

Bureau of Asian Research, vol.10, no.1) 所収, p.12.

- ・ Dower, John W. (1999), "Embracing Defeat : Japan in the Wake of World War ", W. W. Norton & Company, Inc., New York, 1999. (三浦陽一・高杉忠明ほか訳『敗北を抱きしめて 第二次大戦後の日本人 (上・下)』, 岩波書店, 2001年)
- ・ Gluck, Carol (1993), "The Past in the Present", Postwar Japan as History (University of California Press) 所収, p.64.
- ・ Inoue, Seiji (1998), "Across the Altruistic Education into International Ethics - A Few Suggestions from Hiroshima and Japan -", Journal of International Development and Cooperation (IDEC, Hiroshima University), Vol.4, No.1, pp.17-23.
- ・ Kristof, Nicholas D. (1997), "Japan, Korea and 1997: A Year That Lives in Infamy", The New York Times, September 14, 1997.
- ・ Kristof, Nicholas D. (1998), "The Problem of Memory", The Foreign Affairs, November-December, 1998.
- ・ エルネスト・ルナン「国民とは何か」(鶴飼 哲訳), ルナン, フィヒテほか『国民とは何か』(インスクリプト=河出書房新社)1997, 42-64頁所載.
- ・ 姜 尚中「丸山真男における 国家理性 の問題」, 「丸山真男を読む」(情況出版)1997所載, 29頁以後.
- ・ 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』, 吉川弘文館, 1995年.
- ・ 木村勲「思想史の風景 関西文壇の形成」, 朝日新聞連載中, 2001年12月2日付け, 「(3) 明星のロマン主義~華麗さの中の光と陰」参照.
- ・ キャロル・グラック(安丸良夫との対談)「戦後50年~記憶の地平 日本・ヨーロッパ・アジア 交錯するナショナリズム」, 岩波「世界」誌, 1995年11月号, p.26.
- ・ 梁 石日「問われるメディアの感性」, 朝日新聞, 2001年4月7日付け.

## 付記

本稿の内容の一部、「京都・耳塚」に関する論考は、2001年11月6日付け朝日新聞(東京本社版)夕刊学芸欄に、「知られざる『耳塚』の悲劇」と題し、1,600字の小論として発表した。

## Abstract

### **Amnesia in Japanese “Public Memories” of Being Victimizers in East-Asia during the Last Four Centuries – Reconsidered as an Issue in Education for International Understanding –**

Seiji INOUE

Professor in IDEC

“Very few or no descriptions have been found in Japan’s newly-authorized history textbooks of the war crimes that the militaristic regime committed in its overseas territories.” Many times such claims and protests have been brought against the Japanese Government by its Asian neighbours during the last twenty years. “Not a single phrase exists that mentions the Korean sex slaves that accompanied the Japanese Army on its war campaigns”, accuse voices within the Korean Government for example, and “Only a few lines are given for the description of the atrocities committed by the Japanese army in Nanking”, criticize Chinese scholars. If this is true, the Japanese Government is the first to blame for these lacunas of historical fact in textbooks, as the result of its textbook screening policies. A more serious problem however, is that these lacunas come from amnesia on the part of the Japanese media as well as the Japanese people, who are traditionally credulous to their media.

Where then has this amnesia come from? In the 1930s-1940s, the Japanese media was one of the actors that served to drive the nation in a certain ideological direction, following quasi-blindly the Emperor and his self-styled agent, the Imperial Army. Following the expulsion of the militarist system however, the credulous mentality of the nation towards the Emperor and the media did not fundamentally change. As a socio-political system, the Japanese Imperial system has no mechanism of “self-reference”, whilst the Japanese media are alleged to be insufficiently self-critical of having been collaborators with the militaristic governments during wartime. Nevertheless, the media has never been charged by the Japanese nation with having ethical responsibilities for its former pro-militaristic inclination.

Another clear example of national amnesia in Japan is that regarding the historical site named “Mimizuka” (the Ear Mound) which for four centuries has been located in Kyoto. Very strange to observe, the site is not presented in any Japanese tourist guidebooks and its visitors are almost all Koreans. Generally speaking, apart from the inhabitants of Kyoto, few Japanese people know about this site, whilst almost everyone living on the Korean Peninsula knows about it, which was reported to the world via an article written by Nicholas D. Kristof in the New York Times of September 1997.

More than 400 years ago, an ambitious shogun named Hideyoshi Toyotomi twice invaded the Korean Peninsula with an army of 160 thousand soldiers; it proceeded to kill more than 100 thousand Koreans and cut off the noses or ears of its victims. Following the orders of the shogun, the purpose of this was to bring the severed organs home to dedicate them to Hideyoshi as spoils of war. Several years later, Hideyoshi built the Ear Mound (originally called “the Nose Mound”) as a memorial for the consolation of his foreign victims’ amputated organs. Today’s historians argue that this was nothing more than a demonstration of Hideyoshi’s power and benevolence to the world at home and abroad. The Japanese public memory of this tragic monument faded away in the mid-17<sup>th</sup> century under the influence of some delicate changes in diplomacy by the Tokugawa shogunate, whilst the Korean government and people continued to pass down the story from generation to generation as a national legend.

Since the early 1980s however, volunteer activities undertaken by Koreans visiting from the Peninsula or resident

in Japan have begun to restore this minor Kyoto historical site; they have been assisted in this cultural campaign by a number of Japanese volunteers. In 1985, the first phrases describing the Ear Mound in Kyoto appeared in a Japanese history textbook, and in 1997 a large 400-year commemoration ceremony of the Ear Mound was organised by means of Korean NPO initiatives, with assistance from their Japanese counterparts. Thus a little solidarity has been gradually forming between the ancient victim and victimiser, at least on a citizens' level, after several centuries of amnesia in the latter's public memory.